

## 「藻場」 守り続けたい豊かな海

### 栽培漁業の基盤

平成13年度に、富山県水産試験場は富山湾沿岸部の漁場環境調査を実施し、比較的浅い水深帯にはアマモ・ガラモ・小型海藻類(テングサ・ツルアラメなど)よりなる藻場が、総面積で約1,100haにわたって存在していることを確認した。しかし、潜水調査に当たった研究員は、多くの藻場で衰退の傾向が見られたと報告している。

急深な富山湾沿岸部のような水域では、極沿岸部に繁茂する藻場海藻の表面が生物生産の重要な場となっている。藻場では、海藻の表面から光合成によって作られた有機物が分泌され、それらを利用する微小な生物が群集となり、全体として独特の生態系が形成されている。また、その生産力を活用して成長・繁殖する魚介類が藻場水域に集まる。

このような藻場は、有用な魚介類の種苗を放流して育てる栽培漁業の基盤としても、重要な環境資源である。

富山湾における主要漁業の定置網漁は、湾内に回遊してくる魚類を主な捕獲対象とする「待ち」の漁業である。したがって、回遊魚が直ちに湾内から離脱しては漁の効率は落ちるであろう。しかし、餌料生物が豊富に存在する藻場が沿岸部に広がっていれば、回遊魚の滞留を期待出来る。こうした滞留は定置網漁での豊漁につながるだろう。

だが、藻場は沿岸部ならどこでも形成されるのではない。健全な藻場を人為的に拡大するために隣接地に海藻を移植しても、海藻が定着しないことも多い。藻場の形成に必要な流れや水質といった環境条件を制御する技術を、われわれはまだ完全なものにしていないのだ。

漁場の中や縁辺部に現存する藻場水域に対して埋め立てのような開発行為を行う時は、メリット・デメリットをよくよく考えて判断すべきであろう。その判断によって、私たちに豊かな恵みをもたらしてくれる富山湾の環境を、守り続けることができるかどうかが決まるのである。

38回に及んだ本連載は、今回をもって終了する。連載期間中、県内外の方々から記事について励ましや助言を頂いた。記して感謝する。なお、本連載記事は富山県水産試験場のホームページ上(<http://www.pref.toyama.jp/branches/1690/1690.htm>)でも公開することになっている。公開に同意して下さった北日本新聞社に感謝する。(場長・鈴木満平)



私たちに豊かな海の恵みをもたらしてくれる氷見のガラモ場(ホンダワラ類の群落) =平成13年4月、氷見市虻が島付近。